

祭司としての Ishmael

前 田 禮 子

Ishmael の役割については、'Loomings' の章で、つぎのような説明がある。

*"Grand Contested Election for the Presidency of the
United States.*

"WHALING VOYAGE BY ONE ISHMAEL.

"BLOODY BATTLE IN AFFGHANISTAN." (29)

大きな二つの劇のあいだに上演される小さな幕間劇である、と Ishmael 自身が述べている。劇のプログラムは神によって、ずっと以前から定められていたものである、とも Ishmael はいう。この新聞記事の見出しのような、上演プログラムと印刷の仕方は、Ishmael の役割が小さいということを図柄として示したものであろう。たしかに、大統領選挙は、誰一人知らぬ者のないよう、宣伝されて催される行事である。アフガニスタンでの戦いも、当時西洋世界では広く知られわたった大事件であっただろう。大きな事件にはさまれた小さな事件として Ishmael の航海がある、という位置づけがある。しかし、注意しなければならないのは、どんなに事実に厳密に則していようとも、それらの具体的な事実は、Melville が読者に伝えたいと思っている或る概念を象徴するための手段にすぎない、ということである。上に掲げた目録ふうの見出しは、それでは、何を意味するのかについて、一つの解釈を試みたい。

United States というのは、アメリカのことではなく、なんらかの、統合された状態、精神の達成された状態、あるいは、錬達された魂をもつ人々が入ることを許される神の国、といった概念を含んだものとして理解してみることにする。そうすると、*Presidency* は、そういった人々の長^{おさ}、たとえば、イエスキリストのような試練に耐えた人、選ばれた人、になるということになる。天国に入ることができる人になる、ということになる。要するに、*Grand Contested Election* は、復活をねがう人々に向けられた challenge であることになる。そして Ahab がその役に挑むことになる。

また AFFGHANISTAN は、インドの西にあり、そこにはガンダーラがある。ガンダーラは、東洋と西洋の融合の地であり、ギリシャの影響を受けた佛教美術が栄えた地であ

る。佛教の釈迦は、現世は生老病死が支配する輪廻の世界であると説いた。したがって AFGHANISTAN 云々は、修羅場が永遠にくり返される地上を意味していることにもならないだろうか。Grand Contested Election は、天上への入口を意味していることにもならないだろうか。では、天と地の間にいる、目だたぬ Ishmael の役割は何か、ということについて考えてみる必要がある。

ここでも、Ishmael は BY ONE ISHMAEL といって、彼の本名を明かしていない。彼は、Ishmael なる者の、と、いって、仮に Ishmael とでも呼んでくれ、(Call me Ishmael)、の姿勢をくずしていない。しかし同時に、Ishmael が天と地の間をつなぐなんらかの介在者であるらしいことが、感じとれる。名前を名乗らないことで、かえって Ishmael の本体 (Identity) が透けて見えてくるのである。聖書の中の Ishmael 原型を *Moby-Dick* の語り手 Ishmael が潜在させているのは、いうまでもない。放浪者・反逆者としての Ishmael、また、数えられないほど多くの子孫を増すことになる Ishmael (創世記16:10) を語り手 Ishmael は兼ね持っているのである。聖書の Ishmael の特質は、その豊穡性にあると、いってよいだろう。聖書によると、その Ur-Ishmael ともいうべき Ishmael は、子供のとき、母親の Hagal とともにエジプトの砂漠をさまよった。水がなくなると、母親は Ishmael を一本の灌木の下にねかせ、彼らは泣いていた。神は Ishmael の泣き声を聞かれ、天使をつかわされた。灌木の下を掘ると水が湧き出し、二人は救われたのであった (創世記21:15)。宿屋 Spouter-Inn の亭主 Peter Coffin が、「木の下を^{くわ}で掘り起こせ」(Grub! Ho. ^{めし}飯だ、ほーい) (=Grub-hoe 掘り起こし鋤) という暗号めいた言葉によって、船乗りの泊り客たちを朝食に招いていた。これなどは、Ishmael が生命の豊穡あるいは復活に関わるという聖書の故事を引いたものだろう。Spouter-Inn という宿名にも、水が溢れて吹き上げる、という意味があり、Ur-Ishmael が救われたあの生命の水とのつながりが暗示されていることになる。*Moby-Dick* の中での Ishmael の、秘かな役割が死と復活にあずかるものであることが、Ur-Ishmael の故事をとうして暗示されていると考えることができるだろう。しかし、聖書の故事からだけでは、この世とあの世の仲介者としての、Ishmael の秘儀的役割を説明することはできない。もっと異質な、ギリシャの神の神格をも Ishmael は兼ねそなえているのではないだろうか。

ギリシャ神話の神々は、最高神ゼウスを中心とする、きわめて人間的な転身物語 (*Metamorphosis*) の世界から、やがて次第に、復活をねがう秘教的な、通過儀礼宗教へと変質していく。それはディオニソスのオルヒュース教であるが、こういった秘教的要素を *Moby-Dick* は、きわめて濃厚に含んでいるのである。この秘教的なるものは、キリスト教と相反するものではなく、かえって、復活の思想を互いに補完し合っているのである。ヘレニズムには、アポロ的なものと、ディオニソス的なものとがあった。近代ドイツで、ディオニソスの流れを汲む超人思想がニーチェによって唱えられ、二十世紀にも

多大な影響が及んだのは、広く知られているところである。

Ishmael の役割は、いうまでもなく基本的には、Melville の代弁者であって、Melville の言葉を伝える medium である。作品の中においても、Ishmael は、彼自身が medium であると明言している。つまり、Ishmael は、自分の行為は自分の責任で行動したのではない、といている。彼は、宿命によって行動させられたのである、といている。太古から、あるいは、世の初めから、神によって定められていた役割を行っただけである、といて、Ishmael は、彼の自由意志を否定している。それでは、Ishmael という容器 (vehicle) を誰がどのように使うというのだろうか。一つには、聖書の Ur-Ishmael の分身としての役割があり、一つには、復活を司る祭司としての働きがある。

なぜ Ishmael を medium や vehicle としてとらえるかという考えの根拠として、Quaker 教徒のキリスト教について理解する必要がある。震該教徒と呼ばれているとおり、彼らは、^{かみ}神がかりをつねとする宗派の人々である。Mapple 神父の説教は、聖書の中のヨナ自身が、Mapple 神父を medium あるいは vehicle として、その体と舌を借り、直接語りかけてきたものとして理解する以外に解釈の仕様がなないのである。Quaker 教徒の、そのような特徴を考慮に入れなければ、*Moby-Dick* の登場人物の行動を理解することは無理である。Quaker 教徒の人々は、つねに、Holy Ghost なるものを受け入れる用意があり、medium つまり霊的媒体者として、つねに、直感や靈感に身をゆだねている。*Moby-Dick* に出てくる人物たちは、多かれ少なかれ、霊的交感度の高い人々である。Emerson の唱えた超絶主義 Transcendentalism と Quaker 教徒の生き方には共通するところがあるが、Ishmael の役割についても、この点を考慮する必要がある。

ところで、この世とあの世の仲介者となりうるのは、この世とあの世の両方に精通している者でなければならない。まず考えられるのは、太陽である。太陽は、昼間は、その円板状の単眼でもって、この世を照覧し、夜は、白鳥の曳く舟に乗って、あの世を渡るといわれている。太陽は、単眼の神ヘリオスとして、別の神格を与えられることもあった。ギリシャの昔、太陽神アポロが託宣をし予言を司どっていたが、それは、太陽が天上と地下の両方の世界に精通していることを示しているのである。*Moby-Dick* では、太陽の描く軌跡が、重要な鍵になっていることから、アポロ的託宣を伝える者としての Ishmael の役割がうかがえるのである。

では、Ishmael は一体何者であるのか。太陽神アポロには、ヘルメスという名の弟神がいる。この神は、ギリシャの神々の中では、もっとも行動範囲が広く、その働きはもっとも多方面にわたる有用の神である。この神は、翼のついた帽子をかぶり、手には、二匹の蛇が巻きついた同じく翼のついた杖 (caduceus) をもち、また、翼の生えた靴をはいている。Queequeg は、Ishmael とともに Spouter-Inn で最初の朝を迎えたとき、帽子と靴と銛杖だけを身につけて部屋の中を跳ねまわった。これは、Queequeg が、その身に

ヘルメス神を帯びたことを示しているのであった。

ところで、Queequeg と Ishmael とは、一心同体ともいえるほどに、心を同じくし助けあっているのだが、外面的には、彼らは、まったく正反対である。白人と有色人種、文明国の出身と未開国の出身、多言と寡黙、キリスト教と異教、などである。しかし、二人は、^{かたち}形に影が沿うごとく、一つのもの表と裏といった程度の差しかない。Queequeg と Ishmael は、二人でありながら、二人合せて一人の、ある実体 entity を表現しようとしているのではないだろうか。その実体こそ、神々の使者であり仲介者であるヘルメス神である。つまり、Ishmael の多弁こそ、ヘルメス神の資質である。

ヘルメス神とは、商業、学術、雄弁、発明、体育などを司り、また盗賊、羊の群れ、旅人の守護神である。ローマ神話の Mercury に当たる。Mercury は、いうまでもなく、水銀、を意味し、Quicksilver と呼ばれる。ところで、N. Hawthorne の *The Wonder Book* は、ギリシャ神話を易しく再話して、児童向きに書かれたものであるが、どの物語の中でも、Quicksilver という名の人物が、仲介者として、物語の進展に大きな役割を果たしている。ところが、*Moby-Dick* では、Queequeg と Ishmael が二人でヘルメス神一人の役割を演じているのである。同時に、Queequeg と Ishmael は、ギリシャ神話の双子兄弟 Gemini の役割もあわせもっているのである。占星術では、双子星座のもとに生れた人は、対照的なふたつの人格をもつといわれている。ひとつの人格だけでは不十分であって、ふたつの人格を合せてはじめて、均衡のとれた人物になる、といわれている。ヘルメス神もまた、医学や学問の守護者でありながら、同時にペテンの神である。Queequeg の動作や行動はパントマイムであって、Ishmael の、言葉による読者だましとは、両者は対照的である。それにもかかわらず、動作と言葉は補いあって、なにかあるメッセージを読者に伝えようとしているのである。そのメッセージは、作品の文体の、二重構造の底の部分にあるのであって、Ishmael は、その部分を語るにあたっては、けっして直截には語らない。彼は、だまし話法とも呼ぶべき表現法でもって、語るのである。Queequeg の動作もまた不可解千万である。未開人であるという設定をそのまま信じて、読者は Queequeg の動作の意味を判じようとはしない。Ishmael の言葉には、裏の意味がかくされているが、それと同じように、Queequeg の動作も、二重構造の、隠された部分を解く鍵となる。*Moby-Dick* そのものが、読者をだますように仕組まれた二重構造になっている。*Moby-Dick* の翌年に出された *The Confidence Man* では、さらに、だますという主題が前面に押し出されている。その作品でも、ヘルメス神の介在という構成が解釈上の大きな鍵になっている。

ところで、さきほど言及した Hawthorne の Quicksilver と、Melville の Queequeg という名前には、なにがしかの類似があるように感じられる。そればかりではなく、どちらも作中では、ヘルメス的働きをしている。Hawthorne と Melville がたがいに影響しあ

ったということが無きにしもあらず、といえるだろう。Melville は二年間かけて *Moby-Dick* を書いたといわれている。Hawthorne は、*Moby-Dick* 完成の直前に、二か月間ぐらいで *Wonder Book* を書き上げたことになっている。Melville は *Moby-Dick* 執筆中の経過をくわしく Hawthorne に伝えたことはよく知られている。どちらがどちらに影響を与えたか、といったことはさておき、当時、Hawthorne や Melville がギリシャ神話に興味をもったことは、アメリカがキリスト教国であることとなんら矛盾するものではなかった。ヨーロッパではルネッサンスがおこってすでに久しく、おそまきながら、Melville の頃には、アメリカでもネオ・ルネッサンスとして文芸復興気運がたかまっていた。ヨーロッパでは、ギリシャ神話に題材を借り、様式もそのまま模ねた裸体彫刻が数多く作られた。イギリスでも、貴族が競って田園に、ギリシャ風の彫刻を配置した広大な庭園を作ったものであった。絵画や音楽や田園に憧れ、当時多くの秀れた作品が生み出された。ギリシャ神話でもっとも活躍したのは、神々の使者であるヘルメス神であったから、この神を物語の構成に組み入れた作品を Melville が書いても、不思議ではない。また、ギリシャ神話にはこの神ほど不可解な二重構造の行動をとる神はいない。あのパンドラの箱を人間に与えたのも、この神であった。Melville の作品の、二重構造性やだましの手法は、ヘルメス神の、この複雑さに触発されたもの、といえなくもない。あるいは、Melville の複眼思考がこの神との共通性を認め、そこに手法を求めていったのかもしれない。Melville の三大小説、*Moby-Dick* (1851)、*Pierre* (1852)、*The Confidence Man* (1857) は、書かれた年代も接近しているが、どの作品もギリシャ神話を題材として取り入れている。その根拠は、各論で述べることにしたい。

Melville の時空概念

Moby-Dick のばあい、この作品にあらわれる時間と空間は、当時の科学的認識としての時空の広がりとは、いくぶん違っていて、どちらかといえば、もっと古い、すでに中世あるいはそれ以前に把握されていた時間の態型、つまり、太陽の動きに沿った暦法的なものである。Melville は、しばしば、合理的科学的な論法を重んじているように見せてはいるが、そういった、事実には則する、という姿勢は、カモフラージュとしての装いであるばあいが多し。中世の時代にすでに、キリスト教カトリック教会に取り入れられた時間は、冬至をもって太陽の誕生とし、春分をもってキリストおよび太陽の復活を祝う、といった季節としての時間の循環、回帰性をもととしている。出発点と終着点があって、それが生と死を引き起こし、さらにまた復活があってまた新たな生と死が繰り返される、といったものである。しかし、古来より、そのような繰り返えしが、自然の現象として時間の中に存在し、人々がそれをまのあたりに目撃しその中に巻き込まれねばならないのは何のためか、という想いがある、人々は、それが神からのメッセージ

として何らかの意図を人間に伝えているのだと考えてきたのであった。単なる繰り返しではなくて、この世の生が終ったとき、裏がえしとしての別の生があって、その永遠の生命とも呼ぶべき別の世界へうまく乗り移れる方法があるのではないか、いや、あるはずだ、という考えが、古来から宗教の根底にあって、そこから発達したものとして、例えば、キリスト教の世界観が存在する。そういったキリスト教の時間観念、また、大きく含めれば、ギリシャの神秘思想も、キリスト教の母胎としての世界観をもっているのだが、それを Melville は、作品 *Moby-Dick* の中に取り入れているのである。

地球の軌道である天の赤道と、天の軌道としての太陽の黄道が、一年に二回、春分と秋分には、重なって交差する。そのときに一方の軌道から他方の軌道に移ることが、可能であるかのように、天体図上では見える。日本でも春と秋の彼岸の日は、この世とあの世の接点であると考えられているのは、このためである。

Moby-Dick 最後の三日間は、最高の小春日よりであって、空と海が溶けあって一つになっている。季節は、ミカエルの祝日 (Michaelmas) の 9 月 29 日の頃ではないかと思われる。この日は、諸聖人の霊を祭る日であって、この世とあの世が出会う日であるとされている。またこの日は、秋の収穫を祝う日である。太陽の通る道である黄道と、天の赤道が交わる秋分の日であるから、天と地が一つに会して諸聖人の霊が生者とまみえる日とされている。天使の長であるミカエルが、天に迎え入れられるにふさわしい聖者の魂をあらたに天に迎え入れる日でもあって、Ahab は、この日のために Pequod 号の旅を準備し、この日のためにすべてを賭けたのだと考えるべきだろう。Ahab にとっては、白い鯨は、金羊毛 Golden Fleece であったのだろう。白鯨は、魂をよみがえらせ、永遠の魂を与える金羊毛であったのだろう。作品 *Moby-Dick* では、ギリシャ神話とキリスト教思想が分かれがたく結びついて、西欧の神話体系が再構成されたというべきだろう。ギリシャ神話とキリスト教は、別個のものというよりは、前者が原始的な形態を残しているのに対して、後者は、世界宗教の域にまで洗練されている、といったところがある。この作品が書かれた頃のアメリカには、ネオ・ルネッサンスの文学風潮があって、キリスト教とギリシャ神話への回帰願望とが矛盾すると考えられていたようには思えない。この頃、超絶主義の思想があったが、これなどは、キリスト教的というよりは、ギリシャの汎神論に近いものである。*Moby-Dick* には、ギリシャ神話の異教の要素を取り入れたものとして、例えば 'Doubleloon' の章がある。ダブルロン金貨 Doubleloon には、double という語が入っているので、二重、二層、表裏、二面性といった意味合いがあり、ダブルロン金貨を見て、それぞれ登場人物が違った解釈をするので、眺められる対象が一つであっても、さまざまな意味がありうるのだということを 'Doubleloon' の章が表わしているのはいうまでもないが、そればかりではない。解釈の仕方によってさまざまな見方が成り立つのだというような単純な意図でもって 'Doubleloon' の章は書かれているのではな

い。Ahab や Starbuck、その他の人物による解釈をすべて繋いで、ジグソー・パズルのように並べてみて始めて 'Doubloon' の意味が解けるようになっているのである。

例えば、もっとも他意のない透明な解釈をしているようにみえる Pip の言葉、

"I look, you look, he looks, we look, ye look, they look." (555)

にも知られざる面がある。see という語を使わずに look を用いているのは、look という語には 0 が二つあって、この語は人の眼球のようにみえるからであるが、そのために look という語が象形文字として使用されているのであろうことは別として、なぜ Pip は I look と言うのだろうか。西洋占星術によると、十二宮にはそれぞれ司どる性質があって、人々はその影響を受けて生れると言われている。それらの性質は十二宮それぞれの motto として表わされていて、列挙すると次のようになる。

| | |
|----------------------|------------------------|
| 牡羊 Aries — I am | 天秤 Libra — I balance |
| 牡牛 Taurus — I have | 蠍 Scorpio — I desire |
| 双子 Gemini — I think | 射手 Sagittarius — I see |
| 蟹 Cancer — I sense | 山羊 Capricorn — I use |
| 獅子 Leo — I will | 水瓶 Aquarius — I know |
| 乙女 Virgo — I analyze | 魚 Pisces — I believe |

Pip が言う I look は、十二宮の motto の中にはないが、Melville が上記のこれらの象徴標語を意識していたであろうことは考えられなくはない。このように、'Doubloon' で語られる言葉は、二重構造あるいは多重構造になってグブっているばかりではなく、超絶主義者であった Melville が一神教としてのキリスト教を前面に押し出さないためにも、作品にギリシャ風の異教的な装いをこらしたのではないだろうか。またその装いが目立ってしまい、Melville が、本質的に、超人思想めくキリスト教の復活思想を信奉していることが、かくれてしまっているのではないだろうか。

注. テキストは、*Moby-Dick, or The Whale* ed, by Charles Feidelson Jr. (Bobbs-Merrill, (1964) を使用した。